

高知県へのホウロクシギの飛来状況 (チドリ目シギ科)

田中正晴

Far Eastern Curlew possible relation between meteorology and the
number visiting Kochi Prefecture, Japan.

TANAKA Masaharu

Key words: Far Eastern Curlew Kochi Prefecture

はじめに

2006年, 高知平野においてホウロクシギ *Numenius madagascariensis* (図1) の多数飛来が観察された。本種はシギ科ダイシャクシギ属し, 全長が63cm, 旅鳥として各地の干潟, 河口, 砂浜, 水田などに飛来する(真木・大西, 2000)。日本で記録されたことのあるダイシャクシギ属は6種(日本鳥類目録編集委員会, 2000)で, 高知県ではダイシャクシギ *N. arquata*, ホウロクシギ, チュウシャクシギ *N. phaeopus*, コシャクシギ *N. minutus* の4種類が記録されている(高知県保健環境部, 1986)。

和田(1973)は, 高知県の野鳥を記した一番古い図鑑である「四国の野鳥」で, ホウロクシギは四国においては3月上旬から6月までと, 7月中旬から10月中旬ごろまで渡来して, 一時滞在がみられるが, その数はあまり多くないと述べている。筆者の従来観察でも高知県への本種の飛来は少数であり, 通常は少数の群でしか見られない。そこで今回本種が多数で飛来した要因を探るため, 観察記録や気象データを検討した。



図1. 南国市前浜に飛来したホウロクシギ。撮影年月日は2004年9月14日。撮影場所は高知県南国市前浜の水田。

観察地と方法

観察地は「狭義の高知平野」である(甲藤, 1976)。すなわち東は香南市夜須町から西の高知市に広がる高知県中央部の平野であり, 西に浦戸湾が拡がり東に物部川が流れる。南側は太平洋である。主として東西方向の丘陵が沈水して, 北側からのびる複合扇状地と浦戸湾に流入する鏡川・久万川・国分川などが河口に堆積した複合三角州とで形成された低地である。東側は物部川水系の扇状地性

高知県のホウロクシギ

表1. 高知県でのホウロクシギの観察記録

初認年	月	日	終認月	日	観察回数	最大個体数	観察場所	出典*
1966	5	16			1回	30+	南国市久枝	A
1974	10				1回	2	香南市吉川町吉原	A
1978	3	20			1回	1	高知市高須	A C
1978	9	17			1回	1	高知市高須	A C
1979	3	24	~	4 14	2回	180+	四万十市実崎 黒潮町入野	A
1979	9				1回	2	香南市吉川町吉原	A C
1980	9	30			1回	3	四万十市実崎	A
1981	5	7			1回	1	黒潮町入野	A
1986	4	20	~	5 19	5回	1	黒潮町入野 宿毛市湊浦 宿毛市松田川河口 香南市吉川町吉原	B
1987	4	14	~	4 25	2回	1	宿毛市福良川河口 四万十市江の村	B
1988	3	31	~	4 19	7回	8	香南市吉川町吉原 黒潮町入野 宿毛市湊浦	B
1988	9	17			1回	1	香南市吉川町吉原	B
1989	4	4			1回	2	香南市吉川町吉原	B
1990	3	29	~	5 5	4回	2	香南市吉川町吉原 宿毛市山田 宿毛市平田 四万十市磯ノ川	B
1991	3	31	~	4 25	2回	2	南国市浜改田 黒潮町早咲	B
1992	8	24			1回	1	高知市五台山	B
1993	3	29			1回	1	南国市浜改田	B
1994	3	25	~	5 19	4回	3	香南市吉川町吉原 四万十市中山	B
1995	3	14	~	5 28	7回	14	香南市吉川町吉原 春野町仁ノ 須崎市 黒潮町入野	B
1995	9	2			1回	1	黒潮町入野	B
1996	3	22			1回	1	南国市坪池	B C
1997	3	22	~	4 8	7回	10	須崎市西町 四万十市下田 南国市物部 香南市吉川町吉原 南国市坪池 南国市浜改田	B C
1998	3	13	~	3 15	2回	13	香南市吉川町吉原 黒潮町入野	B
1999	3	14			1回	9	香南市吉川町吉原	B
1999	9	12	~	10 1	3回	1	南国市前浜 南国市里改田	B C
2003	3	31	~	4 11	2回	3	香南市吉川町吉原	C
2004	4	30	~	5 4	3回	1	南国市浜改田	C
2004	9	14	~	10 6	4回	3	南国市前浜	C
2005	9	13			1回	1	香南市吉川町吉原	C
2006	4	11			1回	74	香南市吉川町吉原	C
2006	10	1	~	10 3	2回	1	南国市前浜	C

※データはA, 高知県の鳥1986, : B, 日本野鳥の会高知支部公開用データベース, : C, 筆者の記録から転載.

平たん地に続いている(甲藤, 1976).

筆者は1972年頃より上記観察地で野鳥の観察を現在まで続けている. 観察方法は他の報告(田中, 2005)と同様である. すなわち不定期であるが通常午後には観察し, 特に旅鳥の通過する春・秋は観察回数を多めに設定した. 鳥種の同定には7倍の双眼鏡と25倍の望遠鏡を使用した. 鳥への刺激を避けるために観察はおもに車中から行った.

過去のホウロクシギの高知県への飛来記録は, A. 高知県保健環境部(1986), B. 野鳥の観察記録を1986年~2000年まで記録した日本野鳥の会高知支部の公開用データベース(2000), およびC. 筆者の記録, によって調べた.

気象データは高知地方気象台の記録(高知地方気象台, 1979, 2006)によった.

結果と考察

2006年4月11日, 悪天候のなか香南市吉川町吉原の物部川河口に, 74羽のホウロクシギが飛来し

ているところを午後には観察した. しかし翌日は飛び去ったようで確認できず, 4月11日だけの飛来と考えられる. 物部川は, 高知県香美市物部町, 剣山山地の白髪山(1769.7m)に源を発し, 南国市東端で土佐湾中央そそぐに68kmの一級河川である(山崎・上森, 1976). 河口付近は一般的な河川とは異なり, 中流域が土佐湾に流れ込んでいるような状態で河原であり, 干潟はほとんど出ない. 観察中には採餌行動は見られず, 何度か飛び上がり空中を群で舞っては場所を変えて河口域に降りていた. ホウロクシギとの同定については, 過去に何度も観察していること, その中での識別点は大きさがトビくらいある点, 嘴の曲がりがつけ根からではなく, 中ほどから曲がっているように見える点, 体下面は下尾筒まで淡褐色であり, 飛翔時は背から尾まで白くない点である(真木・大西, 2000). 他にこの日観察したシギ類はオオソリハシシギ *Limosa lapponica* 1羽, チュウシャクシギ 1羽, セイタカシギ *Himantopus himantopus* 4羽の4種であった. 筆者の観察では, 本年のホウロ

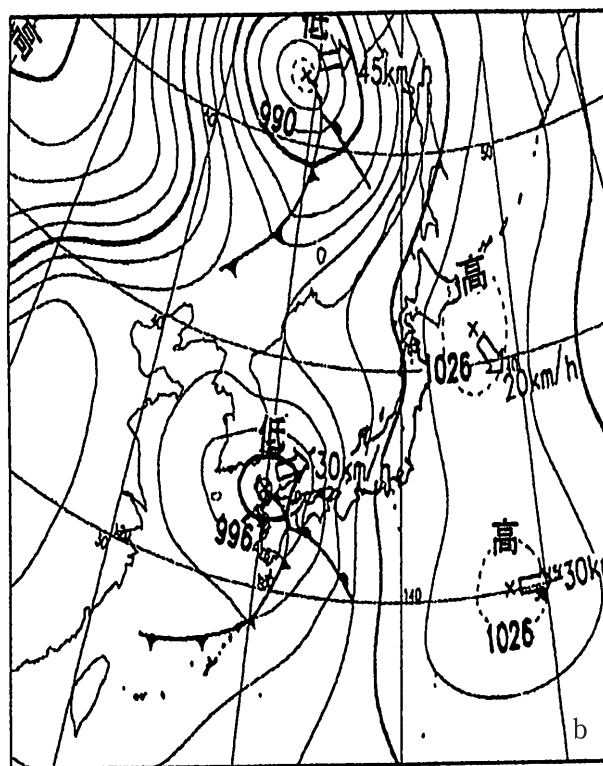
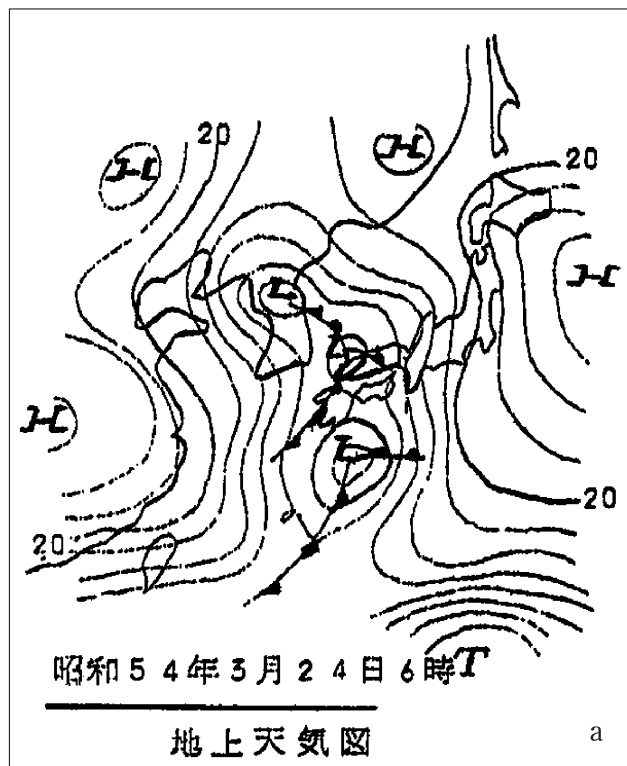


図2 . a : 1979年3月24日は23日支那海には南東にのびる気圧の谷があったが、24日にはこの谷上に低気圧が発生して、日本海と土佐沖の二ツ玉低気圧となって発達しながら東進した。この影響で、高知県では南東の風が強まり、23日22時頃より雨となり、24日1時頃には雨域は県全域に広がり、前線の通過した昼前に最も強くなった。降水量は県中部で多く、総降水量も100mm以上のところもあり、繁藤108mm、高知107mmに達した。気圧の谷の通過は早く、24日の14時頃には雨は止み、天気も回復した。b : 2006年4月11日前線を伴った低気圧が朝鮮半島南部から日本海をゆっくりとした速度で東北東に進み、低気圧から伸びる寒冷前線が日中四国地方を通過した。このため、山間部を中心に大雨となり、本山、佐川、魚梁瀬の観測所では日降水量が200mmを超えた。

また、南よりの風が強まり、宿毛で11日05時54分に23.2m/s (南南東)、室戸岬で11日08時53分に34.6m/s (南南東)、高知で11日10時03分に19.8m/s (南東)の最大瞬間風速を観測した。(高知地方気象台防災業務課, 1979・2006.)。

クシギの飛来は、春はこの1回、秋は南国市前浜で10月1日1羽、10月3日1羽の計3回の観察であった。

ハウロクシギに関する筆者の全観察記録および文献に残る高知県への飛来記録を表1に要約する。ハウロクシギは春と秋に出現するが、観察日だけで見ると春の観察日が55回、秋の観察日が17回と、高知県では春に多くが観察されている。飛来の旬別の時期は、春は3月下旬が最も多く、秋は9月中旬が最も多い。初認・終認については、最も早い春の初認は3月13日、終認は5月16日、秋の初認は8月24日、終認は10月3日であった。

飛来地は、おもに宿毛市から吉川町吉原までの海岸部である。宿毛市から四万十市にかけて飛来地が内陸部に入っているが、ここは松田川から中筋川・四万十川へ続く、標高の低い水田地帯である。高知県東部では吉川町吉原が最東部であるが、東部は鳥類観察者が少ないため記録が出ていない可能性もある。

ハウロクシギは殆どが単独か少数の群で飛来している。しかし1979年3月24日には中村市実崎に180+羽が飛来した記録がある(表1)。本年4月11日に筆者が高知平野で観察した74羽は、その時以来の多数飛来となる。これに関連して、1966年5月16日に南国市久枝で30羽あまりの本種が観察された記録もある(表1)。しかしこの記録は、飛来時期が遅いことから、高知県では4月下旬から5月上旬に飛来のピークを迎えるチュウシャクシギとの誤認が考えられる。

気象記録によれば1979年3月24日は、高知県を挟むように二ツ玉低気圧が発達しながら東進した(図2 a)。この影響で、高知県では南東の風が強まり、前線の通過した24日昼前に最も強くなった。降水量は高知市で107mmに達した。気圧の谷の通過は早く24日14時ころには雨止み、天気は回復した(高知地方気象台, 1979)。一方2006年4月11日の場合は、低気圧から伸びる寒冷前線が中四国地方を通過した(図2 b)。低気圧の速度が遅

く温暖前線全面の南東風系による雨が長時間続き、県内各地で11日までの降水量は200mmを越えた。また11日の寒冷前線の通過により南よりの風が強まり、室戸岬で36.6m/s、高知で19.8m/sを観測した(高知地方気象台, 2006)。またこれらの大雨については、「県全域に春の嵐」(1979年3月24日高知新聞夕刊)、「県内に大雨」(2006年4月11日高知新聞夕刊)と、どちらも新聞で大きく報道されており、大荒れの天候となっていたことがうかがわれる。これら2つの記録は本県へのハウロクシギの多数飛来が、悪天候と関連していたことを示唆している。

ハウロクシギは繁殖地がカムチャッカからアムール川中流域にかけての湿原であり、東南アジアからオーストラリアの干潟で越冬する(樋口, 2005)。オーストラリアで送信機を装着した個体の人工衛星による追跡で、春の渡りではその一部が高知県を通過して、北方へ向けて飛ぶことが解明されている(樋口, 2005)。通常は高知県で羽を休める個体は少数であるが、春の嵐に遭遇した群が緊急避難的に高知県に降りて、それが多数飛来として観察されたという可能性が考えられる。長距離を移動する渡りでは、その途中で起こる天候異変は避けられない。渡り鳥の保護には繁殖地・越冬地の保全だけでなく、異常時に休めるような途中の中継地の保全も考えて行くことが重要と思われる。

謝 辞

ハウロクシギに関する文献を提供していただいた森林総合研究所四国支所の佐藤重穂氏、本稿をまとめるにあたり御助言をいただいた高知大学医学部の熊沢秀雄氏に心より感謝いたします。

引用文献

- 樋口広芳. 2005. 鳥たちの旅, 渡り鳥の衛星追跡. 日本放送出版協会, 東京都, 251pp.
- 甲藤次郎. 1976. 高知平野. 恒石真生他(編), 高知県百科事典, p.317-318. 高知新聞社, 高知.
- 高知県保健環境部(編). 1986. 高知県の鳥1986年. 高知県, VI + 300pp.
- 高知地方気象台(編). 1979. 高知県気象月報, 昭和54年3月. 高知地方気象台, 高知, 26pp.
- 高知地方気象台(編). 2006. 高知県の気象, 平成18年4月(2006年). 高知地方気象台, 高知, 26pp.
- 真木広造・大西敏一. 2000. 日本の野鳥590. 平凡社, 東京都, 654pp.
- 日本鳥類目録編集委員会(編). 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広市, 345pp.
- 和田豊州. 1973. 四国の野鳥. 高知営林局, 高知, 157pp.
- 山崎 修・上森千秋. 1976. 物部川. 恒石真生他(編), 高知県百科事典, p.839-840. 高知新聞社, 高知.

(原稿受理 2007年3月31日)